実践レポート

ＩＣＴを利用した言語活動での論理的読解力の育成について
～国語科(説明文)「パラリンピックが目指すもの」の実践から～

高松市立塩江小学校
教諭　　端山　奈苗

1　はじめに

令和３年度全国学力・学習状況調査(国語科)により、目的を意識して中心となる語や文を見付けて要約することに、本県児童の課題があることが分かった。本校の児童も国語科の学習において、文章を読み取ることに苦手意識をもった児童が多く見られる。特に、説明文に関しては、何をどのように読み取っていけばよいのか分からないと感じる児童が多い。また県版テストでも物語文に比べて、説明文の正答率が低いことが明らかとなった。

そこで、ＩＣＴを活用して、主体的・対話的で深い学びにつながる質の高い言語活動を設定し、３年生で初めて要約を学習する単元である「パラリンピックが目指すもの」の授業実践を行った。

県版テスト	思考力・判断力・表現力等
テスト１（物語文）	８９％
テスト２（説明文）	８３％
テスト３（物語文）	８８％
テスト４（説明文）	７３％
テスト５（物語文）	９２％

[令和３年度３年生県版テストの結果]

2　実践の内容・方法

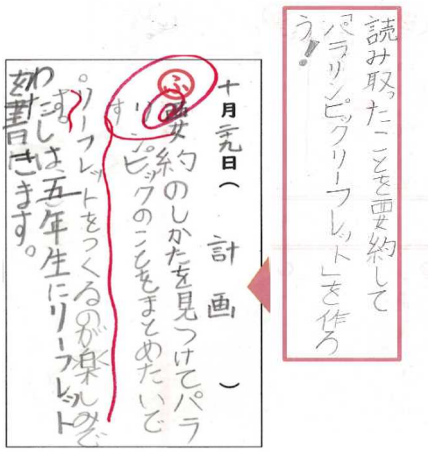
（１）課題に応じた実践(目的の明確化)

①　課題の設定

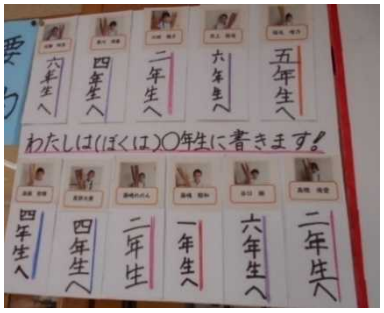
３年生にとって課題意識をもって主体的に学習を進めることは簡易なことではない。そのため、まず夏休みに行われた２０２０東京オリンピック・パラリンピックについて話し合った。「オリンピックは見ていたけれど、パラリンピックは見ていなかった。」という児童が多くいた。しかし、道徳の時間に『パラリンピックにねがいをこめて』を学習し、大日方邦子さんの「パラリンピックのことをみんなに知ってほしい」という願いを知り、パラリンピックのことを全校生に広めたいという意識が高まり、国語科の単元への課題意識につなげた。

②　相手意識をもつ

本単元の目標は、目的を意識して、中心となる語や文を見付けて要約することである。まず、目的を意識するために、児童と話し合い、本単元の目的を「全校生にパラリンピックのことを知ってもらうためにパラリンピックリーフレットにまとめる」と設定した。次に、児童一人ひとりがリーフレットを渡す対象学年を決め、常に相手意識をもって学習に取り組むことができるようにした。また、目的や要約のポイント、筆者の考えや自分が渡す対象学年を常に確認できる場所に掲示することで目的の明確化を図った。



[相手意識が見られる児童の振り返り]



[相手意識を明確にした掲示]　[目的や要約のポイントを常に意識できる教室掲示]

③　振り返りの充実

単元全体を１枚のワークシートにまとめた振り返りシートを作成し、毎時間の授業の始めと終わりに、単元全体の目的やめあて、渡す対象学年等を確認したり、毎時間の振り返りを行ったりした。学んだことや分かったこと、疑問に感じたことを自分の言葉で振り返る時間を十分に確保することで、常に目的を児童に意識させるとともに、視覚的に児童が自分の学びの変化に気付くことができるようにした。さらに、文章を読んで理解したことに基づいて、感じたことを書き留める力や要約する力が身に付いたことを実感させたいと考えた。そこで、振り返りの観点を電子黒板に提示し、分かったことや次にやってみたいことなどを書くように促すことで、児童の疑問から次時のめあてが生まれるようにした。

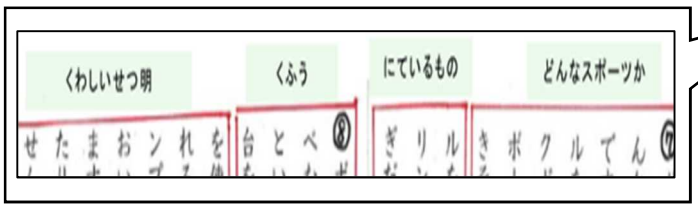
ふり返り
- **パラリンピックが大切にしているものについて読み取って、分かったこと**
- **要約して分かったこと・できたこと**
- **筆者のつたえたいこととのつながり**

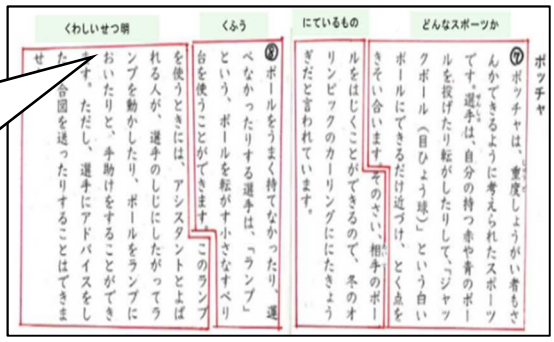
[振り返りの観点]

（２）課題に応じた実践（１人１台端末の活用）

毎時間の授業の終わりに、筆者の考えを踏まえて、読み取ったことを要約する時間を設けた。どの児童も根拠をもって大事な語や文を選択し、要約しやすくするために、１人１台端末（以降：タブレット端末）を活用した。本単元では、ＳＫＹ株式会社の学習活動端末支援ＷＥＢシステムスカイメニュークラウドの発表ノートを利用し、筆者の考えである「パラリンピックは、人がもつ多様さを認め、だれもが平等に活躍できる社会の実現を目指すためのもの」を踏まえながら、文章を読み取り、要約できるようにした。

まず、筆者の考えを基に、大事な語や文を見付けやすくするために、競技ごとに４つの観点に分けた。例えば、「ボッチャ」の競技が書かれた段落では「どんなスポーツか」「にている競技」「障がいに応じたくふう」「くふうのくわしい説明」などの観点に分け、段落ごとにどのような内容が書かれているのかを共通理解する場を設け、児童とともにその観点を教科書に書き込んだ。書き込んだものを画像に取り込み、スカイメニュークラウドの発表ノートに貼り付け使用した。

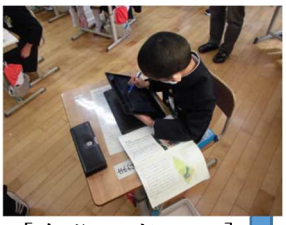




[大事な語や文を見付けやすくするための４つの観点]

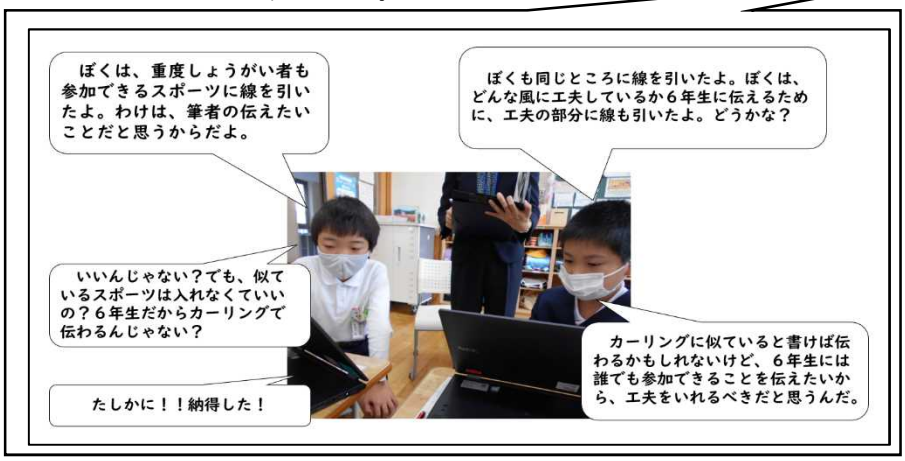
次に、タブレット端末を用い、共通教材を確かめながら、文章の中の大事な語や文を見付け、タブレット端末に、青色の線を引いたり、文章を削ったりしながら、自分の考えを整理した。

ペア交流で話し合う際には、対象学年が異なる児童同士でペア交流をさせることで、リーフレットを渡す対象学年のことを考えながら、根拠をもって説明することができるように場の設定を工夫した。ペアで見付けた大事な語や文などは、赤色のペンで記入することとし、相手が異なっていても必ず伝えるべき語や文は何かや相手によって選択するべき大事な語は何かを共有しながら、読み取りを深めることができるようにした。



[自分で考える]

[ペア交流をする]

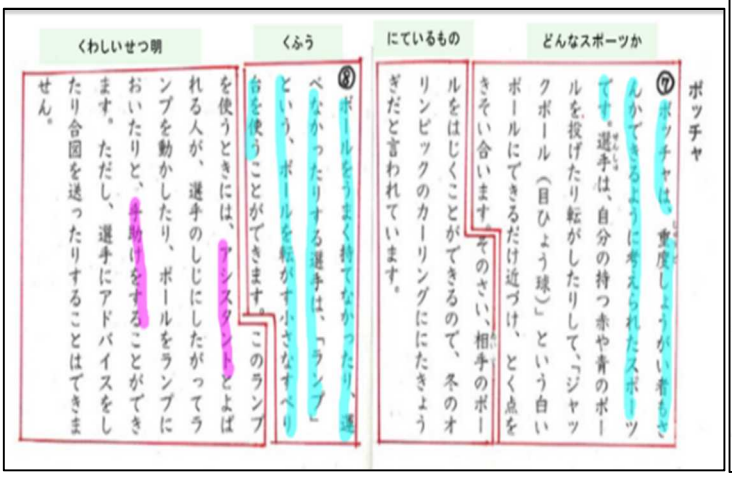


[全体で共有する]

[要約する]

このペア交流では、相手が６年生だった場合、どのように伝えるべきなのかをペアで吟味をした。筆者の考えを踏まえ、本当に選ぶべき語や文は何かを根拠をもって説明できるように話合いを展開した。ペア交流で話し合ったことを発表ノートで提出し、電子黒板を使って、全体で共有した。対象学年が異なっていても要約文に入れるべき語や文を共有し、全員が納得したことを黒板に教師が記入した。

話し合ったことをまとめ、もう一度自分のタブレット端末にまとめた内容を整理し、ワークシートに要約を行った。



ボッチャ

⑦ボッチャは、重度しょうがい者もさんかできるように考えられたスポーツです。選手は、自分の持つ赤や青のボールを投げたり転がしたりして、「ジャックボール（目ひょう球）」という白いボールにできるだけ近づけ、とく点をきそい合います。そのさい、相手のボールをはじくことができるので、冬のオリンピックのカーリングににたきょうぎだと言われています。

どんなスポーツか

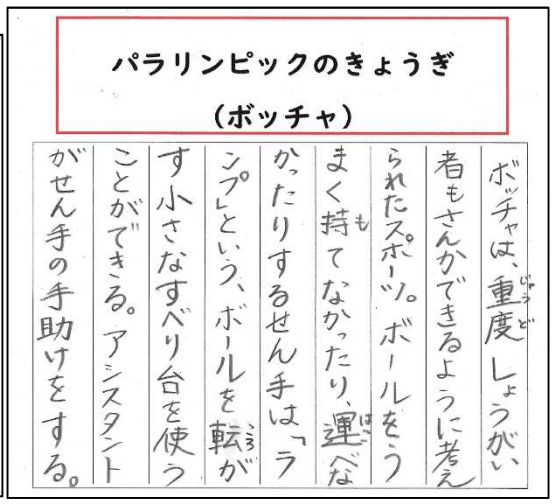
にているもの

⑧ボールをうまく持てなかったり、運べなかったりする選手は、「ランプ」という、ボールを転がす小さなすべり台を使うことができます。このランプを使うときには、アシスタントとよばれる人が、選手のしじにしたがってランプを動かしたり、ボールをランプにおいたりと、手助けをすることができます。ただし、選手にアドバイスをしたり合図を送ったりすることはできません。

くふう

くわしいせつ明

[吟味し、確認した発表ノート]



パラリンピックのきょうぎ

（ボッチャ）

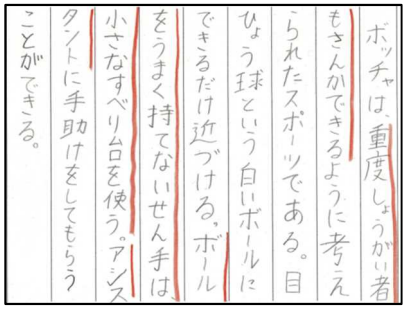
ボッチャは、重度しょうがい者もさんかできるように考えられたスポーツ。ボールをうまく持てなかったり、運べなかったりするせん手は「ランプ」という、ボールを転がす小さなすべり台を使うことができる。アシスタントがせん手の手助けをする。

[要約したワークシート]

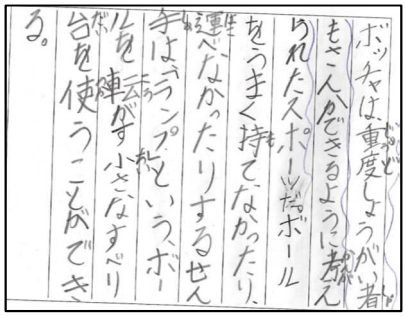
3　実践の成果

児童とともに単元のゴールを決めることで、最後まで意欲的に単元の目的が途切れることなく取り組むことができた。また、相手意識をもつことで、「教科書を丸写しでは困る。」「要約の仕方を正しく知りたい。」と児童自身が学ぶ必要感をもつことができた。毎時間、要約のポイントや筆者の考え、リーフレットを書く対象学年を確認することで、児童が何を読み取ればよいのか、どのような目的で要約を行っているのかを児童自身が理解し、取り組むことができた。このような相手意識の明確化が目的を意識できることにつながったと考える。

思考ツールとしてタブレット端末のスカイメニュークラウドを用いることで、線を引いたり、文章を削ったりすることが容易になり、どの児童も同じスタートラインで学習ができた。友だちと吟味することを続けていくことで、論理的読解力の向上だけでなく、一人ひとりが相手に応じて、必要な語を補足し、自分なりに工夫して書くことができる児童も増えた。また、大事な語や文を見付けることに集中することができた。完成した自分のリーフレットを見て、論理的読解力が身に付いていることを児童自身も実感することができた。


ボッチャは、重度しょうがい者もさんかできるように考えられたスポーツである。目ひょう球という白いボールにできるだけ近づける。ボールをうまく持てないせん手は小さなすべり台を使う。アシスタントに手助けをしてもらうことができる。

［５年生対象の要約文］


ボッチャは、重度しょうがい者もさんかできるように考えられたスポーツだ。ボールをうまく持てなかったり、運べなかったりするせん手はランプというボールを押す小さなすべり台を使うことができる。

［２年生対象の要約文］

授業の始めと終わりに、前時で学んだことや疑問に思ったこと、目的を見返す時間を設定することで、自分の考えの変化に気付くことができた。毎時間振り返りを繰り返すことで、児童の学びを価値付ける場になり、児童の自信につながった。

本単元の県版テストでは、思考力・判断力・表現力等の観点の正答率が９８％にまで上昇した。「国語っておもしろい。」「要約名人になれた！」と国語に対する苦手意識を克服することができた。その後の県版テストの思考力・判断力・表現力等の観点の正答率も９０％を超えている。これは、児童が説明文の読み取り方を習得しつつあるからだと考える。

4　普及させたい取組と期待される効果

論理的読解力の育成には、目的を意識した主体的な学びを展開させる言語活動が必要である。本単元の実践で、中心となる語や文を見付け要約する力は向上した。このことから、目的を明確化した単元展開は、どの教科においても、児童が主体的に学ぶ手立てになると考える。また、思考ツールとしてタブレット端末のスカイメニュークラウドを利用することで、児童の思考が図や表として視覚的に分かり、論理的読解力の習得につながる効果が期待されると考える。

5　課題及び今後の取組の方向

本実践でＩＣＴを活用した思考ツールを用いて言語活動を展開することで、論理的読解力が向上することが分かった。今後は、思考ツールとしてのＩＣＴ活用についてさらに考え、実践していきたい。また、児童が単元全体を通して、主体的に学びを積み重ねていくためにどのような言語活動がふさわしいかなどについて実践研究を積んでいきたい。児童の「わかった！」「できた!」を一つでも多く増やし、児童と一緒に喜べる学習を、これからも目指していきたい。